

連載 プロマネの現場から

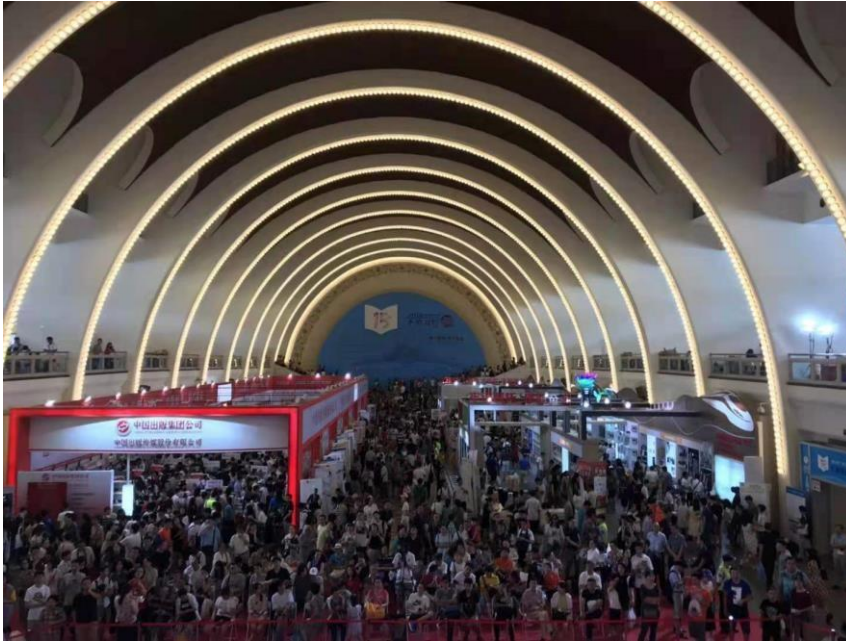
第 160 回 上海の魅力的な本屋さん「書店4.0」(続)

蒼海憲治(大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

最近の中国の本屋さんは、単に本を買う場所ではなく、カフェが併設され(「書店2.0」)、文房具や小物などの雑貨も買え(「書店3.0」)、作家の講演会やサイン会、読み聞かせ会などサービスを楽しめ、文化を感じる場(「書店4.0」)となっていると、前回紹介しました。ネットでの読書が普及した現在においても、本屋さんは、新しい知的な空間、知を感じることのできる貴重な場所になっています。

新型コロナが蔓延する2020年以前、上海の夏の楽しみの一つは、上海市内の中心部である静安寺近くにある上海展覽中心で開かれる「上海書展」でした。中国中の出版社や有名書店が500社ほど集まる上海最大の本の見本市、ブックフェアでした。





2018年、2019年の二回参加しましたが、毎回、大盛況でした。印象的だったのは、昼間の開催はもちろんですが、夕方からも入場でき、仕事帰りに立ち寄ることができたことです。

今年も中止になるようですが、今年は6月5日から20日まで、66上海夜生活節・shanghai night festival が開催されました。協賛する書店では、「夜読」として、22時まで、本の読み聞かせ会などが催されていました。通常の見本市であれば、日中での開催が多いと思いますが、集客のために時間の制約を柔軟に見直すなど、様々な取り組みを行っていることがわかります。

前回は、上海市内の本屋さんを一部紹介しましたが、今回はその続きとして、上海市内の本屋さんに加えて、中国各地を出張や旅行をする中で、立ち寄った街角の本屋さんを紹介します。

1. 思南書局・詩歌店



上海の旧フランス租界地内にあって、歴史ある教会をリノベーションし、上海で最も美しい書店といわれる本屋さんの一つです。1932 年に建てられたロシア正教会の建物「St. Nicholas Church (圣尼古拉斯教堂)」を「教会中の教会」(Church in church) をコンセプトに改装しています。総量 45 トンの鉄プレートを利用して、「古い石の教会」の中に「新しい鉄の教会」が造り上げられており、店内は大聖堂のような荘厳な雰囲気が感じられます。詩歌店という名前が付けられているように、店内は詩集がメインで世界各国の詩集や散文が集められています。「一切の理論は灰色で、緑に萌えるのは、生命の黄金の樹だ」というゲーテの『ファウスト』の一節も原文で飾られています。日本のコーナーもあり、正岡子規や松尾芭蕉や石川啄木など多くの日本人作家の翻訳本も展示されています。店内の喫茶店もよい雰囲気ですが、外にはバルコニー席もあるので、プラタナスの並木を眺めながらコーヒーを飲むひと時は貴重な機会だと思います。

2. ZiWU 誌屋



上海の原宿と呼ばれる田子坊の近くにある本屋さんというよりは、読書スペースになります。3階建てのレンガ風のとてもおしゃれな建物です。ドアを開けると、日本のアーティストの名和晃平さんの作品「プリズム鹿」がありますが、その後ろにある巨大な壁面には、写真関連の芸術書が 3000 冊以上、国内外の有名な写真家の重要な画集が収納されています。ここはアトリエも兼ねている雰囲気があり、2階・3階は展示エリアになっています。入場料を 50 元（約 800 円）払う必要がありますが、まさに「本が読める美術館」になっています。

3. 朵雲書院 (duoyun) ・上海タワー旗艦店



中国随一の高さを誇る超高層ビル・上海タワー（上海中心）の 52 階、地上 239 メートルにある書店です。作家・余華氏曰はく、「最も天に近い書店」になっています。2200 m²の超大型スペースには、6 万冊以上の本があり、外国語の本も多数あります。

しかし、ここも本を買う場所ではなく、来店客の目的は別にあります。書店併設のカフェでコーヒーを買うと、書店専用の展望デッキに出て、眼下に外灘の景色を見ることができます。上海タワーは、浦東の金融センターの一つであるため、隣の森ビルや金茂ビルでの打合せが終わった後、立ち寄ることができます。昼の景色から薄暮、そして夜景まで 1 時間ほどで堪能することができます。

4. 朵雲書院・広富林店



上海タワー旗艦店と同じ、上海世紀出版集団が手がける「朵雲（duoyun）書院」の系列書店になります。この本屋は、上海市内の南西部にある松江地区にある、広富林文化遺址公園の中にあるこだわりの書店です。

まず、広富林文化遺址公園は、兵馬俑などと同じように、1958 年に付近の農民が偶然に発見し、石器や陶磁器などが多数出土した場所になります。最も古いものは、5000 年前の新石器時代の遺骨、稲作跡であり、また、長い間、紡績も行われていたこともわかっています。メイン施設である「広富林文化展示館」は、屋根から下が水中にあるため、一見すると、水没しているかのような建築で、地下博物館となっています。この有料の公園の中にある書店ですが、建物そのものは全く本屋にみえません。それもそのはず、安徽省南部の徽州（き

しゅう)にあった木造建築「明代高房」をこの場所に移設したものだからです。徽州は、古来より美しい山水と雄大な風景を有し、文化が栄え、俊才を多く輩出してきたことで広く知られています。黄山は上海から近いため、週末の山歩きでも有名な観光スポットですが、宏村など周辺の村落は、かつてここがとても豊かな地だったことがわかります。

敷地面積 1600 平方メートル、2 階建てのこの建物は、周りに廊下があり、高い壁に囲まれて独立しています。中央部には、「松石境」と「水雲郷」の二つの景観庭園が設けられています。この庭園を眺めながら、中国茶やコーヒーを楽しむことができます。

5. 幸福集芸・黒石公寓店



幸福集芸（シンフージーフェイ）書店の黒石公寓店は、復興中路を挟んだ、上海交響楽団のコンサートホールの対面にあります。復興中路は、上海の中でも一番歴史的建築物が多いエリアになっています。もともとは「復興公寓」と呼ばれていたアパートですが、アメリカの宣教師ジェームス・ハリー・ブラックストーンが家主だったことから、中国語訳の「黒石公寓（ブラックストーンさんのアパート）」という愛称で親しまれています。1924 年に建てられた歴史建築物を活かして、書店やカフェにリノベーションされています。

とても美しいアーチ状の入口とタイルの床。長い通路の両側に書籍が連なっています。コンサートホールのそばという場所柄のため、付近に楽器など音楽関係の店舗が多いですが、書店内もレコードや CD、音楽関係の書籍の専用コーナーが充実しています。

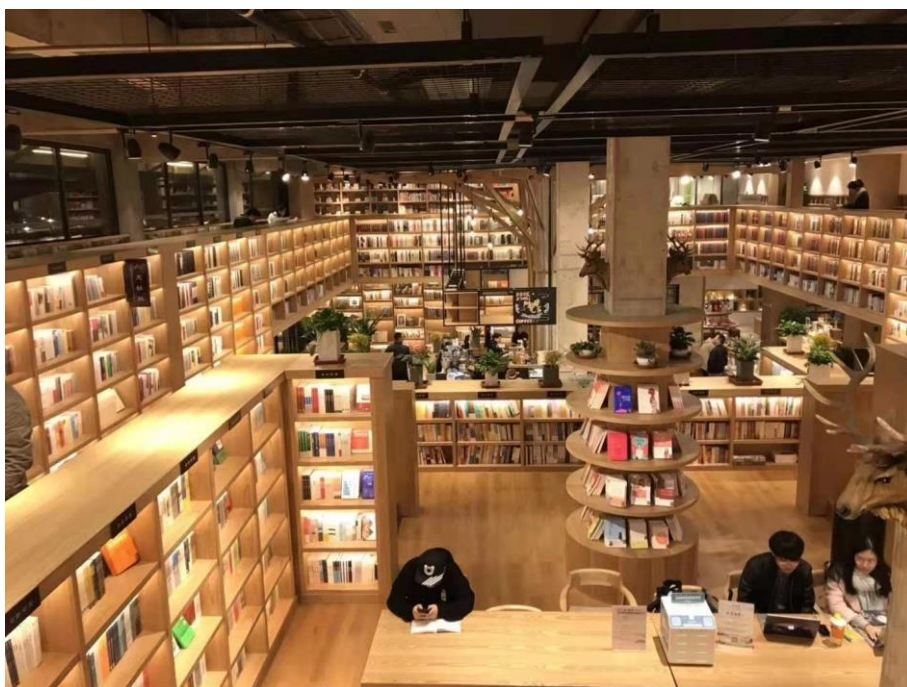
6. 上図書館



上海図書館内にある本屋さんです。上海市や上海の歴史に関する書籍、上海を舞台にした小説等が壁一面にあります。そのため、上海に関する本に興味がある方にはお勧めです。書店の中には、作家による講演をしたり、本の読み聞かせをしたりするスペースなどもあります。「書店 4. 0」ならぬ、次世代図書館である「図書館 2. 0」というべきスペースになっています。

ここからは、上海以外の書店の紹介になります。

7. 武漢：時見鹿書店



時見鹿書店は、武漢にいくつかありますが、その中で「森林書店」と呼ばれます。武漢で一番有名な湖、「東湖」のほとりにある美しい本屋さんです。この書店は、三棟の建物が中庭を囲むように配置されており、青い瓦と赤い柱があり、正面を湖、前後を山に囲まれている、とても美しい空間になっています。このお店の名前は、「書山漫心、如鹿帰

林」という漢詩から採られているように、鹿が林に帰ってのびのびするように、本の山の中でゆったり過ごす様子を表しています。あらゆるジャンルの本、30万冊が所蔵されています。

8. 武漢：物外書店・武漢光谷 K11 店



武漢の東側である光谷はソフトウェアパークになっていますが、その近くある高級ショッピングモールであるK11の中にあります。超高級デパートの一角に、一見閑散とした、とても贅沢な空間があります。階段状になった閲覧スペースで、書店内にある本を座って読むことができます。

9. 南京：先鋒書店・駿恵書屋



南京に先鋒書店はいくつかありますが、そのうちの一つである五台山体育館地下車庫にある店舗は、BBC 放送によって「世界の美しい書店ベスト 10」に選ばれています。地下駐車場跡に作られた書店は、名前のとおり「パイオニア」「アヴァンギャルド」を表しているように思います。今回紹介するのは、老門東老街にある駿恵書屋店になります。この駿恵書

屋は、安徽の富裕層から資金を集めて建築され、実に六百年の歴史を持っています。かつて安徽の科挙を受験する生徒たちが、「郷試」の試験直前に勉強を行ったり、休息したりした場所になります。安徽省南部の伝統的な徽州木造建築であり、この歴史的建造物をイノベーションして書店として利用されています。

10. 北京・紅帆書屋



北京の中関村近くにある書店。中関村は、北京市内の西北に位置し、北京大学や清華大学が位置するエリアで、中国のシリコンバレーとも言われるスタートアップの集積エリアであり、イノベーションの特区になっています。2019の夏、電気街としても有名なので足を運んでみましたが、残念ながら数棟ある巨大なビルはすべて閉鎖されていました。その近くにあり、一休みしたのが、この喫茶店。共産党とラッキンコーヒーがコラボした本屋兼喫茶店でした。ラッキンコーヒー（中国語名：瑞幸珈琲）は、「中国のスタバ」ともいわれる2017年創業の中国初のコーヒーチェーンです。2018年に北京に1号店を出店してから、わずか3年で6912店（2020年5月時点）に急成長しています。2019年には、巨額の売上水増しが発覚し、倒産するかどうか話題になりました。店舗形態ですが、滞在型はほとんどなく、持ち帰りや配達専門が中心で、ネット対応に特化しています。

同様に、スターバックスとコラボした書店もあり、「書店2.0」として、win-winな関係を作っています。

1 1. 厦門：新華書店・中山路步行街店



厦門（アモイ）の定番の観光地として有名な「中山路步行街」にあります。100 年以上の歴史を誇る街並みは、とても美しく、毎日が夜市のような楽しい場所になっています。その

一角にあるこの新華書店は、中国の国営書店ですが、ここもとても顧客にアピールする空間になっています。洞窟を探検するように、ワンフロア毎に階段を上がっていく楽しさがあります。

1 2. 大連：猫的天空之城概念書店



大連港のそばにあるベニスを模したイタリア街にあります。書店の雰囲気は、ジブリの世界、『天空の城ラピュタ』や『魔女の宅急便』を連想させる空間ですが、「猫空」のコンセプトは「未来に手紙を書く」というものです。宛先は、自分でも誰でもよく、日付を指定すれば店が代わりに発送してくれるようになっています。そのため、店内にはオリジナルのハガキや便箋のセットがたくさん置かれています。美味しいお茶やコーヒーを飲みながら、誰かに向けて手紙を書いたり、本を読んだりする、というのは素敵なコンセプトだと思います。

2階建てで、1階のカフェで注文したコーヒーを飲みながら2階のスペースで読書を楽しむことができます。

中国には、すでに 5000 以上の巨大ショッピングモールがあり、さらに毎年、500～600 が新たにオープンしているといわれています。ショッピングモールの格を上げるためにも、賃料の大幅な減免措置や最初の 5 年間無料などにより積極的に本屋さんを誘致することで、素敵な空間が続々と作られています。また、政府も、日本の消費税にあたる増値税（書籍の場合、13%）を免除して後押ししています。現在の中国の書店の隆盛は、巨大ショッピン

グモールを経営する不動産開発業者の利益主導の副産物にすぎないという人もいます。本を買う人がほとんどいない、非常に美しい空間は、バブル期の象徴的な存在とみなす意見もあります。一方、改革開放以前の中国では、国営の新華書店と、零細な個人書店しかなかったことを比べると、本を手にする機会が大幅に拡大し、ネット経由での本の購買も含めると、膨大な本の実需に裏打ちされているともいえます。

まだまだ行ったことのない書店も多いですが、現在進行形でできつつある魅力的な本屋さんにも、機会があれば足を運んでみたいと思っています。